

### “藤枝市学習チャレンジ事業受託” 2022. 6. 30(thu)

2022年6月16日のテレビ静岡のニュースでご存じの通り、今年度被保護世帯等の子ども達の学習支援事業「藤枝市学習チャレンジ事業」を、5度目の挑戦で特定非営利活動法人静岡県教育フォーラムで受託しました。

学習塾など教育関連事業主達で構成されています当フォーラム故に、何としても同事業は受託すべきと挑戦し続けてきました。それは、参加する児童生徒たちが「自立学習」できるように指導したかったからです。即ち、被保護世帯だからと言っても、いつまでもこうした事業に甘んじる訳にはいきません。塾屋がこう言うのもおかしいですが、私達は、学習指導のプロとして、今ある環境、即ち、学校で配布された教科書と副教材、辞書、ノートで学力を付けるという「自立した学習方法を身に付け」させたいのです。飢餓に苦しむ人達に食物を支援するのではなく、食物を育てる技術を指導する、ひいては学校を作り、学びを支援することと同じです。

数回指導して感じたことは、彼らは休憩することもなく黙々と勉強する、ほんとに真面目な子達ですが、定期試験の答案を見ると10, 20点台、基礎基本、物事の原理、そこからの解き方をしっかりと理解してないんですね。しかし、教科書は「自学自習」用にできています。副教材を活用すれば、より教科書の基礎基本、物事の原理、解き方を理解できます。例えば、中学3年生の因数分解には、解法の順序があります。①まずは共通因数を()の外にくくり出す。②公式を使って因数分解する。③共通する多項式をくくり出し、それをMと置き換え公式を使う。④ある文字が含まれる項と含まれない項に分ける。勿論、これは教科書に書かれています。これに沿って解けば、因数分解の問題は必ず解けます。そうした解法のポイントを彼らにしっかり指導し、自立学習できるようにしたいと思います。

### “「子どもが育つ条件」 柏木恵子著、岩波新書2008年” 2022. 5. 8(sun)

私のこれまでの46年間の経験から、これほどまでに幼児教育の重要性を問う本に初めて出合いました。以下本書から抜粋・要約しますが、皆様もぜひ本書をお読み下さい。年代は私が推察して書き入れました。ご了承ください。

ここ20~30年の赤ちゃんの研究から、赤ちゃんは未熟で無能である一方、有能な能力を備えていることが発見された。即ち、これまで赤ちゃんははっきり見えないと言われてきたが、新たな研究によって赤ちゃんの視覚は実は敏感で正確であり、しかも積極的なものであることが明らかになった。見たいものを見る、複雑なものや新奇なものを努めて見るといった好奇心に溢れている。それも細かな特徴をとらえようと活発に視線を動かす。自発的に外界を探索し、新奇で複雑な情報を取り組んでいる。

有能なのは眼の機能だけではなく、聴覚も同様で、胎児期から母親の音声を識別し、誕生後も聴覚刺激を敏感に受け止めている。とりわけ人の声に格別の関心を示し、自分の興味に応じてくれる人が大好きである。

子どもは成長するに従って、自力でできることが増えていく。するとその新しい力を使うことや、その力でできたことに強い興味をもつ。それは子どもにとって知的好奇心を満足させている至福のときである。乳児が知的好奇心を持ち、外界との交流を求める積極的存在であることを知れば、自ら育つ力のある子どもを育てるとするのは、おこがましい。

子どもは自ら学び、自ら育つ力をもつだけではない。その力を発揮できたとき、子どもは最高の満足と自己有能感をもつ。子どもは能動的な学習者である。

子どもが自発的に熱中する活動は、子どもが育つことそのものである。

1950年頃、児童心理学者シャーロット・ピューラーは、子どもが自分にできるようになった力を用いることに喜びを見出し、その力によって様々なことを発見し、育つことの重要性を指摘し、これを「機能の喜び」と名付けた。

現代は、この「機能の喜び」がとかく無視されている。親は「良育」にせっかちなあまり、子どもが熱中していることに我慢できないようである。遠回りにも時間の無駄に見える。そのため、自分が考える「よかれ」の計画路線に子どもを歩ませる。

ユネスコの就学前プロジェクト（2007年）は、早期の知育限定の教え込みが必ずしも効果を上げないこと、逆に「機能の喜び」を味わう自発的、探索的な活動の方が重要なことを報告している。

「機能の喜び」を味わう機会の減少は、自分が学ぶ力をもっていることについて知る体験を、子どもから奪うことである。同時に、子どもの自己効力感を育てる機会をも奪っている。親の過剰な教育熱がかえって、子どもが自ら育つことを疎外してしまっている。その意味でも、子どもの「発達権」の保障が急務である。

さらに、赤ちゃんは生まれながらに個性があることも発見されている。刺激への敏感さや反応の激しさ、あるいは睡眠、排泄、哺乳などの規則性、なだめられやすさなどには、幅広い個人差がある。それは気質といわれる。気質は育てられ方や環境の影響を受けるよりも前に、誕生時に既に備わっている。

このような子どもの有能さと個性や気質の発見は、養育法についてのこれまでの定説に変更を促すことになった。

勿論、愛情や環境などが重要なこと自体は、誤りではないが、子が備えている刺激への高い感受性と個性を考慮せずに、おとなの側から一方的に愛情や刺激を送っても効果は得られない。それどころか、かえって逆効果にさえなる。

親たちは、とかく子どもがどう育つかを、すべて親の育て方次第だと考えがちである。子どもの眼を見て、笑いや発話に耳を傾けて、それに応えながら読み聞かせることが大事である。そのためには、子どもの反応を味わい、それに応答的になれるぐらい親の側にも心の余裕が必要である。

さらに子どもは、成長するに従って気質以外にも、その子ならではの特徴や得手・不得手などの個性が出てくる。子どもの特徴が活かされ、子どもが熱中できる機会が与え

られたときに、子どもは最大の満足を得る。そして、その機会を側面から支えてつくってくれた人に対して、自分をわかってくれていると安心感と信頼感を覚える。

逆に、子どもの能力や特徴を無視して、「よかれ」だけでことを進める親に対して、子どもは自分が受容されているという感覚は、なかなかもてない。やがては不信、あるいは反逆にもつながる危険を孕んでいる。

子の特徴や、そのときの状態に的確に応じた対応をすることが重要なのは、愛着の形成の場合も同様である。

子どもに応答的であること、子どもに備わっている敏感な感覚を使ってやりとりすること、この二つは子どもが愛着の絆を結ぶうえで大事なことである。

子どもが多かった頃は、それぞれの子の性格や行動の違いを知ることができ、その子の個性や長所などが理解できた。子どもが少なくなり、親の眼が届くようになった一方、かえって子どもの個性がみえにくくなっている。そこに、画一的な「良育」に風潮が広まり、応答性を欠いた子への関わりが目立つようになっている。

子どもの日々のふるまいをじっくりみることが、子どもを育てるうえの第一歩であり、親の教育力の核である。

すぐに手や口を出さず、少し距離を置き、時間をとって子を見て、子どもがしていることを尊重する態度である。みる側に安定した余裕のある気持ちがないとできない。親自身がひとりのおとなとして成長していることが、安定した気持ちで子どもと向かい合い、見守るうえでの大前提である。

子どもがしたことに対してフィードバックすることは、応答性の一つである。これには、「こんなにできた」「よくやった」「すごい!」といったプラスのフィードバックと、「それだけ?」「もっと!」といったマイナスのフィードバックがある。前者に対して子どもは、自分がしたことや、できたことがちゃんと認められたと感じ、自己効力を強める。逆に、後者は「ダメなんだ」「自分はできないんだ」といった無力感につながりやすい。

子どもは、いつも自分とは何かを、子どもなりに問い続けている。その際、身近な人が自分をどう評価しているか、その人からどう遇されているかは、自分に対するイメージの重要な重要な材料になる。親が子どもに対して行うフィードバックは、その点でも、大きな役割を果たしている。

まず、考えるべきことは、子どもを母親だけに任せるのではなく、複数の多様な人々の手と心で育てることの重要性である。

人間の子どもが育つということは、身体や運動的側面をはじめ、知的側面、情操や道徳的側面、あるいは対人的側面など多岐にわたる。こうした多様な側面が育つ過程において、複数の養育者が関わる必要がある。「母の手」だけでは十分ではないし、母親一人の力では限界がある。それどころか、母親だけで子どもの養育の責任を抱えてしまう

と、ストレスを強めてしまい、結果として、育児不安につながる。また、その責任感から一方的な「先回り育児」が助長され、当然子どもにも悪影響を与える。

また、核家族や少子化が進行している今日、家庭内では祖父母やきょうだいなどの親以外の存在が少なくなっている。さらに、家族が地域と交流する機会も乏しくなっている。こうした状況は、必然的に子どもが様々な人との関わりの中で育つ機会を低下させることにもなっている。

従って、親以外の手と心の子育てに活かし、子どもの生活と体験を豊かにする社会的な仕組みが、今日において特に必要である。

子ども達の「機能の喜び」を得る体験がいま、決定的に欠けているし、親自身も、この機会を子どもから奪っている。子ども達にその経験を与えることこそ、いま社会がなすべき重要な役割である。

東京都武蔵野市にある「0123」という育児支援施設の育児支援では、スタッフは、子ども達にあえて教えることをしない。子どもが自発的に始めたり、熱中したりしている遊びや活動を、側面から見守る姿勢に徹している。子どもの活動をよくみて、それがうまく運ぶように側面からそっと手を貸す「黒子」の役割に徹する。

誰からも指示されたり、教えられたりしない自由度の高い場面で、子どもは戸惑うこともなく、どの子も自分から遊具を選び、遊びを工夫して、熱中した時間を過ごす。親にもスタッフにも思いがけないようなことを、子ども達はやってのける。親たちは、こんなに熱中する子どもの姿をみたことがないと驚き、「熱中して遊んだためか、ここに来た日はぐっすりとよく眠る」と異口同音に述べる。

動物に新しい芸を仕込むには、アメとムチの訓練しか方法がない。ところが、人間は、自分から新しい行動を習得する。他人が何をしているか、その結果どのようなことが起こるかといったことを観察して、その行動を自分のものにしてしまう、「観察学習」ができる。しかも、人がやっているのをみながら同時にその通りに行く、「サルまね」とは違い、いつのまにか観察していたことを後で適切な場面でやってのける、「遅延模倣」

(何度もみる必要はなく、一度で我がものにしてしまう効率的な方法)ができる。ママゴトで父親役になると、食卓で新聞を広げながら食事をしたり、母親役の女の子が鏡の前でパタパタと化粧するなど、観察して学習する遅延模倣の例は少なくない。

他者の行動を模倣することは、生後2~3週の赤ちゃんもできる。模倣するだけではなく、逆に赤ちゃんのすることをまねる人をじっと見つめ微笑む。赤ちゃんは「自分がまねられている」ことがわかっている。

赤ちゃんは特に人的刺激が大好きで、他のものよりもずっと長く知覚し続ける。人の顔と声を正確に聞き分ける。そばにいる人の動向にもとても敏感で、その人のすることに同調的な反応をする。その人が見ているものに自分の視線を走らせたり、その人が指さすとその先をみたりする(「共同注視」)。ごく幼いうちから他者への関心と、自分を他者に関わらせて共同的にふるまう傾向が強く、そして誰かと一緒にいることが好き

である。このような他者への関心、他者と協同的でいたいと思う気持ちが、模倣や観察学習など社会的な学習の基盤である。子どもは、人と共に人から学ぶ「社会的学習者」である。

観察学習は大変高等な行動で、そこには他者の行動を的確に観察する力、それが自分にとって有用かどうかを判断する力、他者から得た情報を自分の中に採り入れて保持する力、適切な場面でその行動を発動する力といった一連の認知的・対人的な働きが必要である。人間に備わっている大脳、その高い知能の働きがこれを可能にしている。子どもは周囲の人々を観察し、それをよしと判断すればたちどころに自分のものにしてしまう。

親自身が日頃、子どもに言っていることと正反対のことをしていて、それを子どもが観察してしまうと、しつけの効果は無に帰してしまう。親はまず認識すべきことは、子どもは有能な観察学習者だということである。観察学習はモデリング（誰かをモデルにしてその行動を自分のものにする）とも言われるが、その代表的な研究者アルバート・バンデュラは「子どもは（親から）言われたことはしない、親の見たことをする」と記している。

家庭の教育について問われるべきは、子どもの観察学習のモデルとしての親のあり方である。親自身が日々成長・発達し、生き活きと生活できているかどうかという問題が関わってくる。

子どもはごく幼いうちから、子ども達同士での集団生活を楽しむこと、また、他の子どもから多くのものを学ぶことが、研究において確認されている。

乳児のいる保育園の生活は、笑い声や楽しそうな声でいっぱい、生き活きしている。乳幼児は、担当の保育者から細やかに心身の世話を応答的に受けている。そのような保育者に子どもはすっかりなつき、強い愛着を形成している。勿論、だからといって、親はもういないというわけではない。迎えに来た親に飛び込んでいく子どもの姿は、保育者も親も、どちらもが子どもの愛着の対象であることを示している。

保育者だけではない。子どもは、仲間の子どもの達とも強い愛着の絆を結ぶ。愛着の対象は、子どもが外界を探索し、冒険し、学んでいく際の安全な基地となる。心細さを感じると、愛着している人のところへ戻ったり、あるいは、その人がいることを確かめて安心したりする。

長らく、愛着は子どもと母親との一対一の関係で育つものとされてきた。いまでも根強い「三歳児神話」などはその典型である。しかし、それは、子どもが家庭で母親（だけ）に育てられる場合が圧倒的に多く、そうしたケースしか見えなかったからである。このことは、母子関係を過度に重視する偏見を助長し、母子密着という弊害さえ生むことになった。

乳幼児の集団保育が増えたことに伴い、子どもは母親のみならず、保育者、友だちなどの間にも強い愛着の絆をつくり、それをベースに探検し、学習していくことが明らかにされた。

親たちを含めた社会的な意識として、「幼い子どもは家庭で母親がみるのが一番」という考えが潜在的に強いことも無視できない。こうした母性神話は、かつての日本の保育行政にもうたわれていたが、現在では、さすがに行政の指針などからは消えている。しかし、人々や社会の意識の中に根強く存在してきた母性神話は、そう容易には消滅しない。

誕生直後から、子どもがもっている人への関心、人と関わることへの積極的な態度は、どんどん強まっていく。子どもの誰か一人がある動作をすると、まるでつられたように別の子が同じ動作をする、「共振」と呼ばれる現象が起きる。こうして自分一人だけではしなかったこと、できなかったことを、他の子どもと一緒にいることで、次々と学んでいく。

さらに、見慣れない場所や見知らない人に出会うと、自分が知っている人の表情や行動を見て、安心したり、同じようにふるまったりするなど、「社会的参照」もできる。他人から情報を採り入れて、自分のために活用している。

これらはいずれも、他者とともに学ぶ、他者から学ぶ行為であるが、これは人間だけがもっている知性であり、社会性である。このような高い能力をごく幼いうちからもっていることは、子どもが育つことの本動力となっている。こうした力を発揮する機会、あるいは集団の中で他とともに学び育つ機会が、家庭では決定的に不足している。

すでに述べたように、少子化によって家庭におけるきょうだいとの交流も希薄となっている。少子化によって、二人きょうだいどころか、一人っ子も稀ではなくなり、それぞれ個室を与えられるのが一般的である。

このことは、親とも友達とも違う、きょうだいという関係の中で、人とのつきあい方を学ぶ機会をなくしている。親と子は、「保護する・保護される」という上下の関係であり、甘えや許しが特徴である。子どもはいずれ多様な人間関係の中で生きていくことになるが、そこでは甘えや許しは、必ずしも通用しない。自分の意思をきちんと表明したり、他者の意見も聞き、そして自分の意見を主張するか抑制するかを状況に応じて調整するといった対人ルールを習得していることが必要である。こうした力は、けんかする、仲直りする、協力もするが競争もするといった、きょうだいとの関係で育まれるものである。その機会が、きょうだいの数の減少と個室、勉強第一の生活によって急速に減った。

加えて「ギャング集団」といわれる異年齢の子どもたちとの遊びや活動も影をひそめた。異年齢集団といえば運動部のように、上下関係やルールが重視されるものが多くなった。このような状況は、子どもの対人関係の未熟さをももたらしている。自分の気持ちをうまく表現できない、自分の意見を状況に応じて押し退いたりする力が乏しい、

すぐにキレるといった行動もみられる。現在深刻化しているいじめなども、そうした対人関係能力の未熟さと無関係ではない。

早期教育は、むしろ知育よりも社会的、対人的な面こそ必要である。対人関係の力は、子ども自身が試行錯誤し、他者のふるまいをみて体得していく。かつては、家庭に色々な人が出入りし、きょうだいもたくさんおり、地域との交流もあり、親の知らないところで子どもはけんかしたり、よそのおとなに叱られたり、他の子とのやり方をみたり、といった体験を通して、対人関係能力を身につけていった。今日、親ができることは、幼少時から、親以外の様々な年齢の者との交流の機会を積極的につくることにつきる。

これまで子どもの発達に影響するものとして家庭や親が重視され過ぎた。子どもは親や家庭以外の色々な集団の中で自ら学び、外界の世界から大きな影響を受けることが実証的に明らかになっている。子どもは幼い時から多様な人への強い関心を持ち、他と交流することを楽しむ存在であり、自ら学ぶ力をもった発達の主体である。子どもは親のしつけの受動的な受け手ではない。「自らの発達の能動的プロジェクター」ともいえる存在である。また母の手だけ、あるいは家庭内だけでの生活は、こうした子どもの豊かな能力と関心に応えきれず、子どもの育ちを阻んでおり、その意味で貧困な環境である。あらゆる問題を親のしつけのせいとするような風潮は間違いである。むしろ子育てを社会化していく意義はここにある。

父親さえ育児不在の現状では、「母子隔離」的な環境こそ、むしろ「保育に欠ける」とみることができる。

重要なのは、「誰が」よりも「どう関わるか」、即ち養育・保育の質である。保育の質として重要なのは、子をよくみて理解し、それに基づいて応答的に関わることにつきる。それが子どもの積極的な生きる意欲と力を触発し、その育ちを活性化させる。この保育の質が子の養育に関わる人に求められる条件である。

子どもと程よい距離をもって、子どもをよくみて、子どもの立場に立って応答的に関わることのできる人、即ち「社会的親」「心理的親」と呼べるような立場の人間が、子どもにとって必要である。子育ての社会化、育児支援の目的はこうしたところにある。

育児支援施設「0123」では予想に反し、0歳児の来所が多く、しかも年々増加している。上の子どものついでに連れて来られた0歳児が、そこで自分から遊び出す。寝かされている子が傍の子の方をみたり、声をあげたりする。言うことのできる赤ちゃんは、他の子の方へ這っていき、声で注意を喚起したり、積み木を握っては投げて、にっこり笑顔をみせるなど、他の子どもと一緒に時間や空間を精一杯楽しんでいる。このような活発な動きを目にした母親は、赤ちゃんの有能さに目を開かれている。

母と子だけの閉じた家庭は、親の眼が届き、万事安全な環境である。しかし、刺激を求め、人とのつながりと関わりを求める子どもには物足りない。

育児支援には多様な人が関わり、子どもが多様な人と出会い交流することが重要である。母親とは違う（支援事業に携わる、育児経験のある）女性と出会うことも、子どもにとっ

では重要であるが、家庭における父親の育児不在と同様に、支援事業においても多様な刺激を与えられる男性不在はやはり問題である。

自分の心の働き—嬉しいこと、嫌なこと、気持ちのよいことなどを誰しも実感して知っている。これは動物でもすること、できることである。ところが人間だけは、それ以上のことを知るようになる。他人がどう感じているか、どのような気持ちでいるかなど、他者の心がわかるようになる。「心の理論」といわれる。人間の子どもは、かなり早くからこの力をもっている。色々な年齢の子どもがいる保育園では、先生から世話を受け、友達から何かをしてもらった嬉しい体験や、逆にけんかなど自分と他者との対立も経験する。こうした豊かな対人経験は、他者の心を敏感に察する力を育む場でもある。そして、他者の心に応えようとして、その人のために精一杯の力を出して援助する態度も育まれる。

「皆で育てる、褒める、叱る」という標語がある。そのことによって、子どもが、親だけではなく色々なおとなから見守られている安心感や信頼感をもつようになることを期待している。

子どもの特徴や長所というものを親は案外気づかずにいるものだが、親以外の人から認められ、褒められる体験は、子どもにとっては励ましになり、自己発見や地震にもつながる。意識しなければ、こうした体験を子どもに与えることはできない。今日の親子を取り巻く状況を考えれば、家庭や親に子どものしつけ、責任を厳しく問うよりも、育児支援施設などの社会的な取り組みがもっと積極的に進められる必要がある。

#### “神々の指紋” 2022. 5. 1(sun)

多分10数年ぶりに読み直しました。氷河期以前、1万2000年以前に、あのエジプトの大ピラミッドを含む3つのピラミッドやスフィンクスを造った、現代の文明以上に高度に発展した天文学と建築学を有する文明が存在し、氷河期終焉と共に消滅したという仮説。古代エジプト文明とペルー・マチュピチュ遺跡、メキシコ・マヤ文明に伝わる神話を元に地質学と天文学から導いた仮説ですが、久しぶりにこの4日間、上下2巻のこの本に読めふけりました。皆様も是非お読み下さい。

そう、5月11日10時、SBSラジオ「ワサバイバル」にまた電話出演します！お聴きください。

#### “津久井やまゆり園事件” 2022. 3. 15(tus)

本日3月15日は、静岡県立高校の入試合格発表の日（正午発表）。当東進中学NET藤枝駅南口校でも、早くは12時半から合格の吉報が入り始め、職員みんなで湧いていました。みんな、合格おめでとう！！

そんな折、本日付けの静岡新聞夕刊8面“「病いの語り」に導かれ”最終講15回で、別府氏（健康と病いの語りディペックス・ジャパン理事長）がこんなことを書かれています。

氏が現役医師として働いた最後の10年が重度心身障害者の施設で、障害者のご家族の毎日を間近に拝見して教えられたことや、大勢の仲間から学んだことが、その後の自分にとってどんなに大きな宝になっているかを今も実感するという。異動する前に大学や総合病院、専門病院で身に付けた知識や技術は十分に役立つものだったが、着任して早々は相手の意思を読み取ることも、こちらの気持ちや希望を伝えることもできず、自分の無力さに立ちすくんでしまったという。

しかし、別府氏は数日もたたないうちにアイコンタクトや表示、動作を組み合わせることで、どんな相手にも通じることが分かってきたという。ご家族と話し、好きなこと苦手なこと、性格や習慣も知ると、どんなアプローチをすれば相手の心にすんなりと入っていけのかコツがつかめる。ゆっくりと時間をかけ、相手のリズムに合わせる工夫も大切だという

「津久井やまゆり園事件」の加害者は、担当の看護師に入居者一人ひとり意思表示できるか否かを尋ね、意思表示できない入居者を「生きていてもしょうがないから、安楽死させた方がいい」と主張し、殺害に及んだ。

別府氏は、この事件の最大の不幸は、彼が自分の仕事に喜びや楽しみ、意欲や誇りを見つけれなかったことにあるように思えてならないという。肉体的な疲労や、単調な仕事をもたらす精神的な落ち込みは誰にでもある。そこに小さな発見の喜びや驚きが加わり、周囲からポジティブな言葉が掛けられていれば、あのような事件は起こらなかったに違いない、という。

私も、元職員が言語障害をもつ娘さんとスムーズに会話している場面に何度も接しましたが、その度にその娘さんの言葉がどうしても聞き取れない私（右耳が突発性難聴の後遺症で殆ど聞こえませんが）は、その光景が不思議に思えてなりませんでした。

別府氏は、言葉になり得ない表情や身体の動きで示される「語り」の一つ一つが受け止められ、世の中を変えることを願ってこの連載を終えました。

相手を理解しようという姿勢が、その「語り」を受け止められるのでしょう。

## ロシアのウクライナ侵攻の実態” 2022.3.11(fri)

3月9日付け静岡新聞朝刊第25面の「時評」で楊海英・静岡大教授は、今回のロシア連邦のウクライナ侵攻を指示した、プーチン・ロシア大統領が、同国連邦内の少数民族軍を動員したことを指摘している。コーカサスのチェチェン共和国からの軍隊は壊滅的な打撃を受けているし、シベリアのブリヤード共和国からの若者も捕虜となった映像がユーラシア各国に衝撃を与えている、と言う。

「夷をもって夷を制す」やり方は、何も今回の侵攻時に限った謀略ではない。今世紀初頭に激化したチェチェン紛争時に最前線の激戦地に派遣されたのは、ブリヤード共和国とカルムイク共和国の兵士だった。両国ともモンゴル系の国で、尚武の伝統がある優

秀な戦士として認められている歴史から、「ロシアへの貢献」が強要された。

現在のチェチェンは紛争後に誕生した親露派政権で、モスクワの意向に抵抗できない。ブリヤード共和国も実権はロシア人に握られているので、この内紛に駆り立てられた。

今回の戦争は、スラブ民族圏を離れてヨーロッパの一員になろうと北大西洋条約機構加盟の動きを見せたことで、ロシアとベラルーシが実力行使で阻止に出たものである。しかし真の目的は、少数民族同士を消耗させ、スラブ民族が漁夫の利を得るためだ、と言う。なんとという独裁者プーチンの陰謀だ。何としてもこの陰謀はやめさせるべきである。チェチェン共和国の二の舞にならぬよう、ウクライナ共和国の平和を祈るばかりです。

“「日本の宗教と政治」島田裕巳著” 2022. 3. 9(wed)

受験シーズン真っ只中。超多忙で、このページもすっかりご無沙汰しております。続々と大学合格の吉報が入り、東進衛星予備校藤枝駅南口校には、合格した大学・学部・学科名が張り出されております。

そんな中、読み耽っておりましたこの本。3600円と高価な本ですが、流石宗教学者・島田裕巳氏ですね。

本書ではまず、国体、即ち天皇を中心とした政治体制に注目した。その考え方は江戸時代に生まれた。当時の天皇は京都御所になかば幽閉された状態にあり、政治的な力はほぼ失っていた。何をするにも徳川幕府の許可が必要であり、それは譲位にまで及んだ。

しかし、水戸藩において「大日本史」が編集される。それは紀伝体の史書であり、代々の天皇の治世においてどういったことが起こったかを記録したものだ。それによって天皇の存在がクローズアップされることとなった。

さらに、江戸時代に生まれた国学の中で、血縁によって連綿と受け継がれてきた朝廷のあり方が高く評価する考え方が打ち出された。本居宣長は、そこに日本が他国に優れている証拠を見出そうとした。

そして、水戸藩の水戸学と国学が結びつくことで、国体の観念が強調されるようになる。そこには近代の訪れが間近に迫った状況が関係しており、日本のナショナリズムの核心に天皇が位置づけられることとなった。そして、尊王攘夷のイデオロギーのもと、天皇が直接政治にかかわる「天皇親政」が模索され、江戸幕府が打倒され、明治政府が樹立された。特に草創期の明治政府は、王政復古のスローガンのもと古代の律令政治へ立ち戻ろうとして、そこには国学者や復古神道家が参画した。

しかし、近代国家を樹立する上で、古代の律令制を復活し、祭祀を司る神祇官を官僚組織の頂点に位置付ける試みは失敗せざるを得なかった。復古神道の教えを広めるために宣教運動を展開しようとしたが、元々神道には教えがなく、宣教自体が無謀な試みだった。従って、こうした試みは頓挫し、国学者や復古神道家を失望させる結果となった。

それでも、憲法を制定しなければならなくなった明治政府は、大日本帝国憲法の冒頭で

天皇を神聖な存在と位置づけ、国家元首である天皇が統治権と統帥権を持つと規定した。そこには憲法の制約が働き、立法権については議会の協賛が必要としたものの、歴史上はじめて天皇の地位が法的に確立されることとなった。

そして、神道は「国家の宗祀」としての特別な地位を与えられ、神社は国からの経済的な援助を受け、神職は官吏として俸給を与えられることとなった。

あわせて歴代の天皇や南朝の忠臣が神として祀られるようになり、明治政府を樹立する上で貢献した官軍の戦没者は靖国神社に祀られることとなった。そして、日清・日露戦争といった対外戦争に打って出るようになると、そうした戦争の戦没者も靖国神社に祀られるようになっていく。

やがて、満州事変を契機に日本が戦争に深入りしていくようになると、天皇機関説（当時美濃部達吉教授）を国体に反するとして排撃する国体明徴運動が起こり、文部省は「国体の本義」を刊行、流布して、天皇を現人神として祀り上げていった。

しかし、日本は戦争に敗れ、連合国による占領という事態に直面することになる。その中心にあったGHQは、日本が無謀な戦争に打って出たのは国家と神道が密接に結びついた国家神道の体制にあったからだとし、その解体を日本側に指示した。それは大きな変化をもたらし、大日本帝国憲法を改正する形で生まれた日本国憲法にも反映されることとなる。

と、もの見事に解説してくれました。その他氏は、創価学会、生長の家、オウム真理教にも触れ、本の帯に書かれている通り、宗教ごしに日本の政治の基層を知る機会になりました。

#### “「もしも徳川家康が内閣総理大臣になったら」”2022. 1. 20 (thu)

第2回日米首脳会談後の共同記者会見での徳川家康・内閣総理大臣の演説が見事でした。「わしは、おのれは自由を求め、平和のために他人には不自由を強いた。しかし、その先には誰もが自由になる平和な世があったのじゃな。この時代（令和の時代）と出会い、わしのつくった幕府を終らせた坂本（竜馬・官房長官）と出会い、わしは悟った。人は自由を求めるものじゃと。それが人が人たる所以であると。

無論、すべては自由にならぬ。人が集団で、生きていくためにはさまざまな決まりをつくらねば、またあの戦国の世のような無秩序な時代が生まれる。自由と不自由、この折り合いをつけることこそが人を率いる者に必要なことじゃ。

この世にいる者は等しく愚かである。愚かであるからこそ、進むのだ。この時代は確実に我らの時代（戦国時代から江戸幕府初期）よりよくなっておる。そして、この先の時代はさらによくなるであろう。愚かであることをひとり一人がしかと受け止め、愚かさを過去から学び、それを克服していく先人たちの汗を学び、未来をつくれ。この時代の発展を信じ、わしは大政奉還（徳川内閣総辞職）をすることを決めた。政をお前たちの時代に返そう。これからの未来をつくるのはおまえたちひとり一人である。おまえたちならできる。

よりよき未来をつくれ。」

“コロナを収束させ、国民の信頼を取り戻すため”、AIとプログラムにより偉人たちを復活させ（その管理と防衛を平賀源内・IT担当大臣が担う）、最強内閣をつくる計画を実行し、徳川家康を筆頭に日本の歴史に名を刻む錚々たるメンバーで構成された最強内閣ができた。迅速な意思決定で、徳川家康・内閣総理大臣は、数々の政治改革を断行し元禄文化を代表する空前の好景気をもたらした徳川綱吉・厚生労働大臣と、幕末の天才医学者緒方洪庵・同副大臣に、「1か月のロックダウン」を指示した。そしてその法整備「感染症特別処置法案」を、まさに伝染病の時代だった平安時代を生き延びた藤原頼長・法務大臣、明治時代の初代司法卿江藤新平・同副大臣が担い、その営業補償などの経済対策を、時代の革命者織田信長・経済産業大臣、欧米を視察し殖産興業による日本の近代化に尽力した大久保利通・同副大臣が担い、さらにその外交処理を、強烈なリーダーシップで南北朝を統一した足利義満・外務大臣、二度にわたる元寇を防いだ北条時宗・防衛大臣と楠木正成・領土問題担当大臣が支えた。そして学校・大学等教育機関の対応を、菅原道真・文部大臣、福沢諭吉・同副大臣が行った。加えて、国民の外出禁止を徹底するため家康は、享保の改革を町奉行として支えた幕臣大岡忠相を警察庁長官に抜擢し、新選組がそれを支えた。また、SNSなどでのデマ情報管理やメディア対応は、承久の乱の鎌倉幕府の危機を御家人らの説得で乗り越えた「尼將軍」北条政子・総務大臣が担った。

また1か月にわたる外出禁止の民の不満を解消するために、大阪城に代表されるスケールの大きさ、ド派手で底抜けに明るいイメージの豊臣秀吉・財務大臣が、腹心石田光成・同副大臣と共に、「すべての民に一律50万円を10日間で支給（最後は、“現金現場給付”も）」した。そして秀吉は、綱吉の元で勘定奉行として財政破綻の危機を貨幣改鋳などの経済政策で立て直し、元禄バブルをつくりあげた天才経済官僚荻原重秀に、「実物貨幣」から「名目貨幣」に統一された貨幣の流通量の安定化を図らせ、また医療施設の増強と反社会勢力排除も兼ね、営業が落ち込んだ歌舞伎町を国が一旦買い上げ分譲するという歌舞伎町の再編を断行する一方で、一旦国債で賄ったその財源確保に、食料自給率4割程度の農業に目をつけ、全国6か所に国営の最先端技術の大農場をつくり、自給率どころか“世界の和食ブーム”に乗り農業輸出大国に変換、国が商売をして儲けるとともに、円の価値も上げ為替でも儲ける政策を断行した。更に、大久保利通・同副大臣を呼び、足利義満・外務大臣の助けも借り、130カ国が参加し1か月に渡った「日ノ本リモート万国博覧会」が開催された。その万博のオンライン来訪者は国内外で実に1億人に上り、日本のアニメや漫画、コスプレや二次創作など「オタク文化」に、能や歌舞伎のライブ配信、eスポーツオリンピックも行われ、それらのイベントの決済は仮想通貨「KOBAN」で行い、莫大な外貨が「KOBAN」に換金された。

この徳川内閣は、最期に「衆議院の解散・総選挙」に打って出て、与党・徳川内閣は95%の議席を得、冒頭の徳川総理の演説のように、これからの未来を現在の国民に託し、総辞職する。

過去の偉人たちの業績を今のコロナ禍対策に見事に反映させた、なんと痛快な物語でした。皆様も是非お読みください。

“あけましておめでとうございます。”2022. 1. 16 (sun)

塾屋や予備校界は、共通テスト1か月余後に控えた、年の瀬の12月からは多忙を極めます。ご無沙汰しております。今日は大学入試共通テスト2日目、試験も既に開始され、後は昨日に引き続き、生徒たちの頑張りを祈るばかりです。

そんな折に静岡新聞を読んでおりましたら、総合研究大学院大学長・長谷川眞理子氏の「おとなしい日本の子」と題する投稿が目にとまりました。氏曰く、「欧米の子と比べて、保育園児のような小さい子どもも、思春期の中学生も、とにかくおとなしい」。保育士1人当たりが面倒を見る子どもの数は、日本の基準では0歳児はおおむね3人、まだひとりで歩き回るわけではないので、欧米でもなんとかなるとの認識だが、1,2歳児は6人、3歳児は20人まで、4歳児は30人までという日本の基準は、欧米では絶対無理と言う。

これでなんとかやれているのは、日本の子どもがおとなしいからだ、と氏は言う。中学校や高校の修学旅行で、新幹線などの鉄道の駅に、思春期の子どもたち100人ほどがきれいに整列している光景に、規律を重んじるドイツでは不可能だ、とドイツ人の友人が言って驚いたそうだ。氏は、これは日本の保育園の時のしつけの賜物だ、と言う。

子どもばかりではなく日本の学生も、欧米の学生と比べて大変静かと感じた、と言う。なかなか手を挙げて質問しない、発言しない、議論しましょうと促してもシーンとしている。日本の学生が何も考えていないわけではないのだが、明らかに発言することが抑制されている、と。

それは、その子どもたちの保護者の皆さんも大変おとなしい、私は感じます。NPOの様々な活動の報告会や講演の後の質問の時間も、何もなく閉会となります。しかし、2000年代に行なわれた国内外での交流合宿での夜のスタッフミーティングでは、当時大学生（数人は高校生）だったリーダーたちは、子どもたちの様子や対応・指導のことで私と夜遅くまで議論し合ったものです。私も学生の頃、当時まだ学生運動の名残もあり、100数十人のバレーボール同好会や静岡ホーム学習会の仲間たちのいる私の下宿に、一時は毎晩やってきては、私と安保や政治、社会を、時には喧嘩腰に議論し合った民主青年同盟の仲間たち（私は所属していません）がいました。こちらもその度に、論破されまいと大学の図書館で昼間本や雑誌を読み漁り、自分の論を組み立て準備したものです。

氏は最後に、「まずは立場や意見の違いを大前提にし、時にはけんかにもなるのだが、それを乗り越えて、よりよい社会を築いていくのが、個人の幸せのためでも、社会の活力のためでもあると思うのだが」と、私もそう思います。